成城大学、思い出の記

高　木　昌　史

今春、定年退職を迎えるので、この機に本学をめぐる思い出を少々綴って、御挨拶に代えたいと思います。

成城大学文芸学部のヨーロッパ文化学科に私が着任したのは、平成 13（2001）年 4 月でした。平成 27（2015）年 3 月まで 14 年間本学にお世話になりました。前半、2009 年までは 1 号館 1 階の中庭に面した研究室でした。金木犀の木が庭にあって、窓を開けると、その季節には芳しい香りが部屋に流れ込んできました。後半は、現在の 3 号館 3 階、共用研究室隣の研究室で、図書やコピー機が近かったので、快適な時間を過ごしました。二種類の快適さを味わった感じです。

専任教員として本学で勤務したのは、前述のように、2001 年からですが、実は、私が成城大学のキャンパスに初めて足を踏み入れたのは、昭和 54（1979）年のことです。文芸学部と短期大学部のドイツ語非常勤講師として赴任した時でした。当時は、現在正門の右側に建っている図書館はなく、仙川沿いには馬場がありました。随分様変わりしたわけです。

6 年間勤務した時点で、専任大学から在外研究の機会を得て、旧西ドイツのボン大学に留学したため 1 年間のブランクがありますが、1986 年 4 月の帰国後、非常勤講師を再開し、専任教員として着任するまでの 15 年間、勤務しました。

非常勤の時代は、2 号館 2 階の短大の講師控室で、非常勤仲間と楽しく談話し、時には帰路、駅前で一杯やりながら様々な情報交換をしました。当時は小田急線の電車がまだ地上を走っていて、開かずの踏切に困惑させられたものです。

平成 13（2001）年 4 月、本学に赴任したとき、最初に驚かされたのは、フレッシュマン・キャンプでした。6 学科が 2 班に分かれて、新入生と教職

員、また教員同士が密度の濃い交流をする様子に、成城大学文芸学部の特色を垣間見た感じがしました。教員の隠し芸も、詳しくは措きますが、堪能させていただきました。

次に感心したのは、入試の折りでした。私は国語の採点をお手伝いしましたが、採点者一同が、一丸となって目的―迅速かつ正確に仕事を終えること―に邁進する姿に稀に見る熱気を感じました。マークシートではなく、手作業ならではの一致団結、そして幾つかのテーブルの間を天女のように軽やかに答案を連繋する副手の皆さんの手際の良さに、何か恍惚とした充実感さえ味わいました。但し、眼を休めようと一息つく間もなく、天網恢恢何とやら、天女が舞い降り答案の束を手渡し飛び去ってゆくのでした。

14 年間の在職中、学問の分野で思い出に残った事柄を幾つかご紹介します。本学に着任した翌年から、民俗学研究所（民研）の所員に任命されましたが、2003 年 4 月に同研究所でプロジェクト「柳田國男とヨーロッパの口承文芸」を立ち上げ、2006 年 3 月まで、文化史の田中宣一先生、国文学科の上野英二先生、ヨロ文の横塚、一之瀬、富山の各先生、経済学部の牧野陽子先生、他、民研のスタッフやヨロ文の院生、総勢 13 名で定期的に研究会を重ねて、その成果を『柳田國男とヨーロッパ』―口承文芸の東西―（三交社、2006 年刊）に結実することが出来ました。研究会は毎回、充実した時間でした。

それが縁で、2010 年、柳田國男研究で有名な元カリフォルニア大学教授のロナルド・モース先生から、思いがけず連絡があって、親しくお話しする機会がありました。

その後、2011 年に本学のグローカル研究員に任命され、翌 2012 年、柳田國男没後 50 周年を記念して、シンポジウム「国際化の中の柳田國男」―『遠

野物語』以前／以後―を、上杉富之センター長と相談の上、企画し、民研協賛のかたちで、モース先生他、東京学芸大学の石井正己先生、田中宣一先生をお迎えして、私の司会で、同年 7 月 28 日に開催することが出来ました。シンポジウムの内容は、雑誌『現代思想』2012・10「総特集―柳田國男―『遠野物語』以前／以後」（青土社）に収録され、同誌には、それ以外に、モース、石井、田中の各先生、民研の松崎憲三所長、法学部の木畑洋一教授、上杉氏と高木の論文が掲載されました。

民研とグローカル研究以外にも本学での思い出は多いですが、「成城　学びの森」もその一つです。2007 年秋冬講座から 2009 年秋冬講座まで、また 2014 年春夏／秋冬の講座を担当させていただきました。聴講者は 20 代の若者から 80 歳を超えた方まで幅広い年代層で、通常の学生相手の講義や演習とはまた別の楽しさや厳しさがありました。教壇に立つことは、換言すれば、教員自身が学ぶことに他ならず、実によい勉強になりました。講座の最終回には研究室でささやかなお茶会を催し、様々な経歴の方々の声を聞くことが出来ました。

思い出を語ると切りがないですが、文芸学部という単位で本学での 14 年間を振り返ると、国文、英文、芸術、文化史、マスコミ、そしてヨロ文の 6 学科が絶妙のバランスの上に、ある種、良い意味での緊張を孕みながら、学部＝共同体を成立させていることを、折りに触れて感じました。特に、人事に関わる件では、投票という名の儀式に、毎回、ハラハラさせられました。また季刊誌『成城文藝』の編集に携わったときに、やはり 6 学科が共同体を構成していることを痛感しました。掲載された論文やエッセイは、専門領域のバラエティーゆえに、読んでいると、様々な発見やヒントがあって飽きることがありません。

最後に、ヨロ文について一言。独仏の哲学、文学、歴史、それに言語学や古典文献学のスタッフで構成される本学科は、グローバル時代の今日、ますますその存在理由が大きくなっていると思われます。学科自体の多様性が、まさしく多様性の時代を生き抜くための示唆を与えてくれるからです。その意味で、今後とも、スタッフが各分野の持ち味を活かして充実した学科を形成して下さるよう願っています。

お付き合いいただいた皆様にあらためて心から感謝申し上げます。

Auf Wiedersehen!